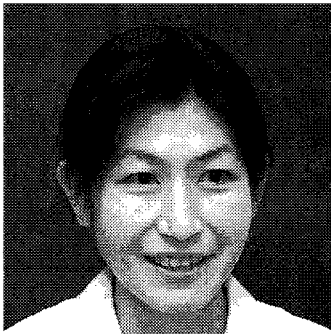


昨今、政治家が小粒になったといわれる。リーダーがいないとの嘆きももれる。確かにいまの政界、世襲議員が目につき、多士済々とは言いがたい。政治家の卵をどうやって見つけ、育てていくか。そのカギを握るのは政党ではないか。今月の「政党?論」では人材育成を2回に分けて考える。まずは「集め方」から。



公募広げ現職含め予備選を



水島 広子さん
みずしま ひろこ

精神科医、元民主党衆院議員

高波淳撮影

1968年生まれ。民主党の公募候補として2000年の衆院選で初当選し、2期務める。著書に「国会議員を精神分析する」など。

1999年の夏、雑誌で民主党の衆院議員候補者の公募広告を目にして、応募しました。どうして政治家にならなかったというより、面接で国会議員に会えるだろうから、自分の考えを提言できればいいやといった気持ちでした。書類選考を通ると、次は集団面接。「選挙にかかるとお金はどうしますか」と聞かれて、他の応募者は「借金してでも」とか答えたけれど、私は「お金がないと選挙に出られないのは変。自分のお金は1円も使いたくない」。絶対に落ちたと思ったんですが、9月になって「栃木1区(宇都宮市など)で出てほしい」といわれた。閣僚経験もある自民党の船田元さんが圧倒的に強かった選挙区です。

東京の生まれ育ちで、宇都宮には行ったこともなかった。10月末に宇都宮に引越して、本格的に選挙準備を始めました。初めは地元支援組織に相手にされませんでした。ところが、地道にあいさつ回りをすると、意外と根性がある、ひよっとすると勝つんじゃないかという議員になってから、党で公募の担当をしました。選考で重視したのは、何のために議員になりたいのかということ。あれもこれも言うけれど、結局何がしたいのかわからない人は支持されない。知識や経験は多少不足していても、自分が何をしたいのかを自分の言葉で話せる人の方がいい。

結局、最後の決め手になるのは、政策や知識よりも、想定されている選挙区での選挙戦に耐えられる根性があるかどうか。候補者がぐらつくのが一番困るので、多少政策的に相いれないものがあったとしても、選挙に向けた人を選ばざるをえなくなってしまう。タレント候補を擁立するのも、政党の戦略としてはあっていい。でも、知名度や実績はなくても、将来党の中核を担える資質のある人が議員になれるルートは必要です。そのためには、まず公募のハードルを下げるべきです。公募対象を全選挙区に広げ、現職も含めて選考してはどうでしょうか。選考方法も、予備選のように党員による投票にする。同時に党費を安くして、候補者選びから参加できることをアピールすれば、党員になる人も増える。例えば、1人が賛成票と反対票を1票ずつ投じられるようにして、好かれ方と嫌われ方のバランスを見ながら最終的に判断するようにすれば、本番の選挙を勝ち抜いていける人を候補者にするができる。

ただ一方で、政治家としての資質は高くても、障害をもっているなどの理由で、厳しい選挙戦に耐えられない人もいる。そうした人も議席が得られるようにするために、政党が名簿順位を決める比例代表制はやはり必要です。政党が決める部分と選挙で決まる部分をうまく併用することで、多様な人材を集められる仕組みにしていけるのが理想的でしょう。

(聞き手・尾沢智史)